

# 具格接辞の変貌とアジア太平洋諸語の系譜（1）

近藤 健二

アルタイ言語学の立場からすれば、日本語がツングース諸語や朝鮮語と、あるいはモンゴル諸語やチュルク諸語と同じ系統の言語であるという主張は凡庸で新味を欠いた発言と見なされようが、逆に、日本語が隣接するアイヌ語やアジア大陸北東端のチュクチ語と、またアラスカやグリーンランドのエスキモー語、さらには北米大陸のインディアン諸語とも同系であるという主張は奇抜で常識はずれの発言と見なされかねない。しかし拙稿(2002)で述べたように、人称代名詞の成り立ちを考える限り、これらの言語の同系性は否定しがたい。人称代名詞の語構成、すなわち人称代名詞と具格接辞との関係が、それらの言語間で、偶然の一致とは思われないほどに類似しているからである。

具格接辞が人称代名詞に変わったという筆者の考えは、人称代名詞と具格接辞とが形態的に似通っているという事実を一番の拠り所としている。またこの考えは、具格接辞が能格接辞としても機能しえたという事実を前提にしている。さらにこの考えは、人称代名詞が明白な文法カテゴリーとして最初からあったのではなく、はじめはゼロ形態として含意されるものでしかなかったという仮定に立脚している。祖語の段階では、含意された「私」や「あなた」が具格接辞 \*-ga / \*-ti / \*-ma / \*-ji と合わさって能格主語として機能していたと考えられる。しかし後の段階になって、含意されていたものがそれら接辞によって明示されるようになった。つまり、「私」や「あなた」といった人称の意味を具格・能格接辞そのものが表すようになったのである。本稿では、このような一種の再構成(restructuring)がチベット・ビルマ語派においても起こったことを指摘しようとする。

## 1. チベット語

はじめに、チベット語の人称代名詞を取り上げ、その成り立ちを考える。

<表1> チベット語の人称代名詞<sup>1</sup>

	絶対格	能格
1人称単数	nga	nga-s
2人称単数	khyed-rang	khyed-rang-s
3人称単数	kho	kho-s

これらの形態のうち具格接辞と結び付けられるのは1人称のnga、3人称のkho、そして能格接辞の-sである。2人称khyed-rangの起源は分からない。

まずngaについて言うと、これはグリーンランドエスキモー語の1人称単数絶対格代名詞ŋaを髣髴とさせる。拙稿(2002)で述べたようにŋaはおそらく\*-ga > \*ngaを経て生まれた形であるので、チベット語のngaも\*-gaの反映形と見なすのが妥当であろう。次に3人称のkhoについて言うと、これは現代朝鮮語の3人称単数代名詞kuを髣髴とさせる。「k」と「g」の音声的類似性から判断して、khoもkuと同様に\*-gaの反映形と見なすのが自然であろう。

このように絶対格のngaとkhoがおそらく属格・具格接辞\*-gaの後裔であるのに対して、能格接辞の-sはおそらく奪格・具格接辞\*-tiの流れをくむものである。すなわち、-sは\*-ti > \*-či > \*-si > -sという音変化によって生まれたものであり、グリーンランドエスキモー語の2人称単数絶対格の代名詞t、中期モンゴル語の2人称単数代名詞či、ツングース諸語の2人称単数代名詞si、中期朝鮮語の3人称単数代名詞čə、上代日本語の2人称および3人称単数代名詞siなどと同源であると考えられる。

ところで、-sが能格接辞であるのは人称代名詞に限ったことではない。-sは普通名詞を能格形にするときにも用いられる。ただしこの場合、属格接辞に-sを付加してそれを能格接辞とする。そして属格接辞には、先行する子音字の性質によって条件づけられる以下の5種類が存在する。

- (1) -kyi : -b / -d / -sの後
- gyi : -n / -m / -r / -lの後
- gi : -g / -ngの後
- i : -' / 母音の後

これら属格接辞の形態が能格接辞の成り立ちと深くかかわっていることを述べておきたい。チベット語の場合、能格は具格に遡り、具格は属格に遡る。属格接辞は\*-gaであった。\*-gaは、日本語の格助詞-gaがそうであったように、本来は属格接辞だったのである。-gaはしかし、具格助詞にもなった。これは属格の機能から具格の機能が派生した結果である。こうして\*-gaは、あるいは\*-kaという異形態は属格・具格接辞となったが、具格はまた能格としての役割も果たすようになったので、それは属格・具格・能格接辞になった。こうなったとき、属格と具格・能格との間の機能的差異を明示するための形態的区別が必要となった。そこで\*-ga / \*-kaに\*-si (< \*-ti)を加えた\*-gasi / \*-kasiを具格・能格接辞として用いるようになった。ところが、\*-gasi / \*-kasiは一種の

母音調和によって、つまり末尾の-iの影響を受けて、\*-ga / \*-kaの部分が\*-gi / \*-kiとなった。こうして生まれた\*-gisi / \*-kisiは次に末尾のiを脱落させるなどして今日の-gyis や -kyis という形になった。そしてこの-gyis / -kyis という具格・能格接辞から属格接辞の新しい形が生みだされた。上の(1)にあげた5種類の形態がそれである。以上のようにチベット語では、属格接辞が具格接辞を兼ね、具格接辞が能格接辞を兼ねるようになった後に、具格・能格接辞が独自の形態を獲得し、一種の逆成(back-formation)によってそこから新しい属格接辞が生みだされたと考えられるのである。

## 2. トゥルン語

次に、チベット・ビルマ語派のライ・リンブ語系に属するトゥルン語を取りあげ、その人称代名詞と具格接辞との形態的類似性を指摘する。そして、人称代名詞がやはり具格接辞に由来するものであることを主張する。トゥルン語における人称代名詞の体系は以下に示すとおりである。

<表2> トゥルン語の人称代名詞<sup>2</sup>

	単数	双数	複数
1人称	go	guči (包括形) guku (排除形)	guy (包括形) gučuku (排除形)
2人称	gana	gači	gani
3人称	gu	guči	gumi

トゥルン語も能格言語であるが、チベット語とは違って、その能格現象は他動詞文主語が基本的に3人称の場合に限って観察される。しかしここで重要なことは、能格が何ゆえに3人称にのみ現れるかということではなく、能格接辞が下に示すように具格接辞と完全に同形であり、具格・能格接辞が以下に述べるように人称代名詞の主要な構成要素とおそらく同源だということである。

(2)	müčü-ka	go	laurā-ka	yal-ŋiri
	男-能格	私	棒-具格	打つ-3単・1単・過去
	「男が私を棒で打った」			

ここに例示した具格・能格接辞-kaは、属格接辞の系統を引く具格接辞\*-gaの反映形

であろう。また<表2>に示した人称代名詞も同じ\*-gaの反映形と見なしうるものから成り立っている。あるいは、それを主要な構成要素として成り立っている。トゥルン語の人称代名詞も、そのはじめりは一律に、「私」「あなた」「彼」といった意味がゼロ形態として含意された\*φ-gaであったと考えられる。

<表2>に示したようなさまざまな人称代名詞形、すなわち人称と数による形態的区別は、含意していたものを明示しようとしたときに生まれた。これは、\*-gaのいくつかの反映形を使い分けたり、あるいはそれらを組み合わせたり、あるいはそれらを奪格接辞の系統を引く具格接辞\*-tiの反映形と組み合わせたりして形成された。たとえば、2人称単数のganaはga(<\*-ga)とna(<\*-ŋa <\*-ŋga <\*-ga)との組み合わせであり、1人称双数のguku(排除形)はgu(<\*-ga)とku(<\*-ga)との組み合わせである。一方、1人称双数のguči(包括形)、2人称双数のgači、3人称双数のgučiは、\*-gaの反映形gu/gaと\*-tiの反映形čiとが合わさったものである。

複数形の語構成は、単数形と双数系ほど単純ではない。1人称複数のgučuku(排除形)がgu(<\*-ga)とči(<\*-ti)とku(<\*-ga)の組み合わせ\*gučikuに由来するものであること以外に、複数形の語構成について断言的なことは言えない。1人称複数のguy(包括形)はgu(\*-ga)に具格接辞\*-jiの反映形yが付されたものかもしれない。2人称複数のganiは、ga(\*-ga)とna(<\*-ŋa <\*-ŋga <\*-ga)とi(<\*-ji)とが合わさってできた形かもしれない。また3人称複数のgumiは、gu(<\*-ga)に具格接辞\*-maの反映形と具格接辞\*-jiの反映形が付加されてできた形かもしれない。

以上のように、トゥルン語のすべての人称代名詞形についてその語構成を明確に説明できるわけではない。しかしながら、具格接辞\*-gaが人称代名詞の成り立ちに深く関わっていることだけは確実であると言ってよい。

### 3. ツオナー・モンバ語

ツオナー・モンバ語は、中国のチベット自治区東南部に居住するモンバ族のうちツオナー・モンバ族と呼ばれる部族が話す言語である。この言語には南部の<sup>マーマー</sup>麻瑪方言と北部<sup>ウエンラン</sup>の文浪方言とがある。下に、両方言の人称代名詞を能格・属格・対格接辞とともに示す。

<表3> ツオナー・モンバ語の人称代名詞<sup>3</sup>

		麻瑪方言	文浪方言
1人称単数	能格	ŋai-te	ŋai-gai
	属格	ŋu-ko	ŋu-ku
	対格	ŋe-le	ŋe-le

1 人称複数	能格	ŋaraʔ-te	ŋara-gai
	属格	ŋuruʔ-ko	ŋara-ku
	対格	ŋaraʔ-le	ŋara-le
2 人称単数	能格	ʔe-te	i-gai
	属格	ʔi-ko	i-ku
	対格	ʔe-le	e-le
2 人称複数	能格	ʔera-te	era-gai
	属格	ʔiruʔ-ko	era-ku
	対格	ʔeraʔ-le	era-le
3 人称単数	能格	pe-te	bi-gai
	属格	pe-ko	bi-ku
	対格	pe-le	bi-le
3 人称複数	能格	peraʔ	bira-gai
	属格	peruʔ-ko	bira-ku
	対格	peraʔ-le	bira-le

上の表について指摘すべきことがいくつかある。まず第一点は、人称代名詞の形態が付属する接辞の種類によってしばしば異なるということである。たとえば1人称単数形は、能格接辞の前ではŋai、属格接辞の前ではŋu、対格接辞の前ではŋeである。しかし、ŋai / ŋu / ŋeはいずれも\*-gaに遡る形であると見なしてよい。ただし、ŋaiに関しては注釈が要る。ŋaiは、おそらく、具格接辞\*-gaに由来するŋa-と具格接辞\*-jiに由来する-iとが合体したものである。

次に、1人称複数形のŋaraʔ(麻瑪方言)とŋara(文浪方言)について言うと、これらも\*-gaを継承した形である。すなわち、語頭のŋaはもちろん、複数接辞の-raʔ / -raも\*-gaの反映形であり、ŋaraʔ / ŋaraの本来の語構成は日本語の「われわれ」のように「私」を意味するŋaとraʔ / raとを重ねたものであったと考えられる。ところで、グリーンランドエスキモー語の1人称単数形はŋaまたはraであり、1人称複数形は「私」という意味のkaを二つ重ねた\*kakaの反映形と見なしうるkkaである。この-kaは複数接辞ではない。ツオナー・モンバ語の-raʔ / -raと違ってそれが複数接辞化しなかったのは、\*kakaが同じ形態の組み合わせだったからであろう。

2人称のʔe / ʔi(麻瑪方言)とi / e(文浪方言)の起源は定かでない。i / eは\*-jiが弱化した形ではないかと思われるが、確かなことは分からない。一方ʔe / ʔiは、\*-gaが弱化した声門破裂音ʔと\*-jiが弱化したものとが合わさったもののように思われるが、

これについても確かなことは分らない。

3人称のpe(麻瑪方言)とbi(文浪方言)の成り立ちもはっきりしない。具格接辞\*-maと具格接辞\*-jiを引き継いだ\*miがまずbiとなり、続いてそれがpiを経てpeとなった可能性も考えられる。biとpeが同源であることは間違いなからう。

人称代名詞に付随する接辞のことにも触れておきたい。まず、麻瑪方言の能格接辞-teについて言うと、これは具格接辞でもある。すなわち、-teは他動詞文主語に付されて行為者を表すか、あるいは副詞的に道具・手段・原因を表す。西田龍雄(1989)は「具格-teの来源は不明である」と述べているが、-teは尊格接辞の系統を引く具格接辞\*-tiの反映形にちがいはない。

さて問題は、このような-teが何ゆえに用いられるようになったかである。この問いに対して次のように答えることができる。1人称単数能格ηai-teの-iはηaが失った具格・能格的意味を補うためのものであった。しかし、この-iも本来の意味を失ってしまった。そこで、改めて具格・能格接辞の-teを付け加えて、その埋め合わせをしたのである。

ところで、ツォナー・モンバ語のηai-teに対応するツァンロ・モンバ語の形態はtci-kiである。このtci-kiのtci-は\*-tiに由来するものであり、接辞の-kiは\*-gaの反映形と\*-jiの反映形とが結合したものであろう。この推論が正しければ、ツァンロ・モンバ語のtci-kiはツァノー・モンバ語麻瑪方言のηai-teと構成要素の配列が逆さまだということになる。このことに関連して、ツァノー・モンバ語文浪方言の具格・能格接辞-gaiにも触れておかなばならない。-gaiというのは\*-gaと\*-jiが合わさったものであろうから、たとえば1人称単数能格ηai-gaiは人称代名詞の方も能格接辞の方も成り立ちが同じだということになる。具格・能格接辞が「私」という意味を担うようになったため、同種の接辞を改めて付加することによって当該部分が主語であることを明示しようとしたのであろう。

ツァノー・モンバ語の人称代名詞について最後に述べておきたいのは、具格・能格以外の格を標示する接辞が人称代名詞の成り立ちにどうかかわったかということである。ここまで筆者は、もっぱら具格・能格接辞が人称代名詞の形成に深く関与したことを指摘した。すなわち、ゼロ形態として含意された人称的意味が具格・能格接辞に乗り移って人称代名詞が生まれたと力説してきた。しかし考えてみれば、ゼロ形態として含意されたものは文の主語となるだけでなく、動詞の目的語となったり、名詞や動詞の修飾語になったりしたはずである。そこで、次のような疑問が浮かぶ。属格接辞や対格接辞も人称代名詞になったのではないか。仮にそうならなかったとしたら、その理由は何か。この疑問に答えるため、上記の<表3>から単数属格形と単数対格形だけを抜き出して下に示す。

- ( 3 ) 1 人称単数属格 : ŋu-ko / ŋu-ku  
 2 人称単数属格 : ?i-ko / i-ku  
 3 人称単数属格 : pe-ko / bi-ku
- ( 4 ) 1 人称単数対格 : ŋe-le / ŋe-le  
 2 人称単数対格 : ?e-le / e-le  
 3 人称単数対格 : pe-le / bi-le

すでに述べたように、具格接辞としての \*-ga はおそらく属格接辞 \*-ga の機能が拡大して生まれたものである。そこで、具格接辞が人称代名詞に転じたと言うなら、属格接辞の \*-ga も人称代名詞に転じたと言うべきではないかと思われるかもしれない。しかし、このように言うことができる場合もあれば、できない場合もあるというのが事実である。たとえば <表 1> に示したチベット語や <表 2> に示したトゥルン語の諸形態は後者の例である。すなわち、これらはほかでもない具格接辞が能格主語となり、これが人称代名詞のいわば汎用形として発達したのである。一方、本節で考察の対象としているツオナー・モンバ語の人称代名詞の場合、属格接辞の \*-ga も確実に人称代名詞の形成に寄与したと考えられる。すなわち、たとえば 1 人称単数属格の ŋu-ko (麻瑠方言) と ŋu-ku (文浪方言) は人称をゼロ形態で標示した \* $\phi$ -ga 「私の」の \*-ga が「私」という意味を担うようになった後に改めて属格接辞が付加されたものであろう。

しかしながら、たとえば 2 人称単数属格の ?i-ko (麻瑠方言) と i-ku (文浪方言)、3 人称単数属格の pe-ko (麻瑠方言) と bi-ku (文浪方言) に関してはこのような解釈をすることはできそうにない。なぜなら、?i と pe は \*-ga の反映形とは見なされないからである。?i-ko / i-ku と pe-ko / bi-ku は、\*-ga とは別の具格接辞、あるいは \*-ga と別の具格接辞との結合形に由来する ?i / i と pe / bi に属格接辞 \*-ga の反映形 -ko / -ku が付加されたものと見なすのが妥当である。

ツオナー・モンバ語の人称代名詞について、最後に、対格接辞 -le に触れておきたい。-le は、朝鮮語の対格接辞 -ul とともに、具格接辞 \*-ga の後裔である可能性がなくもない。具格と対格との意味的な乖離から判断して、\*-ga が対格接辞に変成することはありえないと思われるかもしれないが、具格を他動詞の目的語として従える言語は存在する。したがって、統語的には具格の対格化は起こりうる変化である。\*-ga > -le という音変化も、グリーンランドエスキモー語の 1 人称代名詞に ŋa (< \*-ga) と ra (< \*-ga) が並存するという事実から判断して、ありえない変化ではない。

しかし、ツオナー・モンバ語における人称代名詞の形成に対格接辞が関与したかどうかということになると、属格接辞の場合とは話が別である。というのも、対格接辞は属

格接辞よりもはるかに後代の産物だからである。そしておそらく、対格接辞は人称代名詞の対格形が形成されたよりも後の時代に生まれたものだからである。したがって対格接辞は、ツォナー・モンパ語においても人称代名詞の成り立ちにかかわっていないと判断してよからう。

#### 4. ネワール語

ネワール語はネパールのカトマンズ盆地を故地とするネワール人の言語である。しかしそれがチベット・ビルマ語派のどのグループに属する言語であるかについては定説がない。人称代名詞だけを取りあげても、ネワール語の体系はチベット系諸言語の中でかなり特徴的なもののように思われる。以下に、ネワール語の人称代名詞の絶対格形を示す。

<表4> ネワール語の人称代名詞<sup>4</sup>

	単数	複数
1人称	ji	jhi: / jhi:pī (包括形) jipī (排除形)
2人称	cha	chipī
3人称	wo	ipī / apī

これらの形態はすべて、その起源を具格接辞に求めることができる。まず単数形について言うと、1人称のjiは\*-ji、2人称のchaは\*-tiに遡る。chaは、中期朝鮮語の3人称単数形で、現代朝鮮語では1人称単数として用いられるčəと音的に類似している。3人称のwoは\*-gaが弱化した形ではないかと思われる。

次に複数形の語構成について言うと、どの人称も原則として単数形に複数接辞-pīを付けてつくられている。1人称のjhi:はjhi:pīの-pīが省かれたものと見てよい。また、3人称のipīは\*-jiの反映形であるiに-pīが付いたものである。(ipīは、古いネワール語に3人称単数形\*iが存在したことを想像させる。)そこで問題は-pīがもとは何であったかということになるのだが、これは\*-maと\*-jiとが合わさってできた\*-miの後裔であると考えられる。なお、この考えは後述する言語事実によって補強される。

ところで、ネワール語は能格言語である。したがって、人称代名詞にも能格が存在する。能格は、単数形の場合、1人称がjī:, 2人称がchā:, 3人称がwō:である。このように、単数の能格形は語末の母音を長音化し、それに昇り降り(rising-falling)の声調を付与することによって形成される。こういった音声上、音調上の特徴は、おそらく語末



の-n (< \*-na < \*-ŋa < \*-ŋga < \*-ga) を失ったことの代償である。あるいはむしろ、語末に-nがあったためにそのような変化が生じたと言うべきかもしれない。ちなみに、ネパール語のドラカ方言にはこの-nが残っていて、たとえば1人称単数能格はji-nとなる。この場合、母音の長音化も昇り降りの声調も起こらない。

さて、複数形では単数形と異なる方法で能格形がつけられる。すなわち、複数能格形には以下に示すように能格接辞の -sā: が付く。

(5) ĵimi-sā:      ipī    da-yā      「私たちは彼らを殴った」  
 私たち-能格    彼ら    殴る-完了

-sā: はおそらく、\*-tiの反映形である-sa (< \*-si < \*-či < \*-ti) と \*-gaの反映である-n (< \*-na < \*-ŋa < \*-ŋga < \*-ga) の合わさったものが母音の長音化・音調の付与・尾子音の脱落という変化をこうむって生まれた形であろう。なお、この-sā: という能格接辞に関連して注目すべきは、上に例示したĵimi-sā: におけるように、-pīが期待されるところに-miが現れることである。この-miはまさに\*-maと\*-jiが合わさってできたものであり、-pīのいわば原型として能格の中にだけ現れる。

## 5. ビルマ語

チベット・ビルマ語派の口口・ビルマ語支に属するビルマ語は、ここまでに考察した言語のそれと違って、非常に複雑な人称代名詞の体系を有する。

<表5> ビルマ語の人称代名詞<sup>5</sup>

	単数	複数
1人称	čəno / čəmə / ŋa / čouʔ / kou	čəno-dóu / čəmə-dóu
2人称	khinmyā / hyin / nin / mīn / myī / to	khinmyā-dóu / hyin-dóu
3人称	t̚u	t̚u-dóu

ビルマ語における人称代名詞の形態的多様性は、話し手と聞き手との待遇関係を言語表現に反映させようとしたことによる結果である。清水紀佳(1992)の説明によると、1人称単数の場合には男性用語としてčəno、女性用語としてčəməがもっとも普通に用いられ、ŋaは「おれ・うち」、čouʔは「ぼく・あたし」、kouは「自分」という意味合いで用いられるという。また2人称単数の場合には、男性用語のkhinmyāと女性用語のhyinがもっとも中立的であり、ninは「おまえ(さん)」、mīnは「きみ」という意味合いで、

さらに女性用語の *myí* と *to* は「あんた」という意味合いで用いられるという。なお、1人称複数の *čəno-dóu* と *čəmá-dóu* は前者が男性用語、後者が女性用語である。また2人称複数では、*khinmyâ-dóu* が男性用語、*hyin-dóu* が女性用語である。

さて、ここで求められていることは人称代名詞のさまざまな形式の使い分けを論じるのではなく、それらの語構成を明らかにすることである。清水によると、チベット・ビルマ祖語にまで遡る形式は1人称単数の *ŋa* と2人称単数の *nin* だけだということだが、はたしてそうだろうか。<表5> にあげた諸形式の成り立ちを1人称単数から順番に考えてみよう。

*čəno* は *\*-ti* の反映形 (*čə < \*či < \*-ti*) と *\*-ga* の反映形 (*no < \*na < \*ŋa < \*nga < \*-ga*) から成り、*čəmá* は同じ *\*-ti* の反映形に *\*-ma* の反映形が付加されたものであろう。*ŋa* はもちろん *\*-ga* に遡る。*čou?* は *\*-ti* を引き継いだ *čou* と *\*-ga* が弱化した? から成ると見なしうる。*kou* は *\*-ga* の反映形であるにちがいない。

次に、2人称単数形を見てみよう。*khinmyâ* の語構成は複雑ではっきりしないが、*\*-ga* と *\*-ji* と *\*-ma* の反映形がからみ合ったもののように思われる。日本語の2人称単数 *kimi* にいくぶん似ていることに注目すべきである。*hyin* についても語構成ははっきりしないが、この語は *khinmyâ* の *khin* と同源ではあるまいか。そうであれば、*\*-ga* と *\*-ji* に由来する形であるかもしれない。*nin* も同様に *\*-ga* と *\*-ji* に遡る形式かもしれない。一方、*mín* は *\*-ma* と *\*-ji* と *\*-ga*、*myí* は *\*-ma* と *\*-ji* に遡るものであろうか。*to* の起源はおそらく *\*-ti* に求められる。

3人称単数の *tu* に関して、その起源は *\*-ti* であろう。これは、中期朝鮮語の3人称単数 *čə* に似ている。ところで、ビルマ語には *-tu / -du* という名詞化接辞があって、これを動詞に付属させると「人」を表す名詞となる。そこで、3人称単数の *tu* は本来「人」を表す名詞であり、これが人称代名詞に転用されたと思われるかもしれない。実際、そのように認識されている向きがある。しかし、事実はむしろ逆である。すなわち、具格接辞から3人称代名詞が生まれ、これが契機となって名詞化接辞の *-tu / -du* ができたと考えるべきである。

複数形に目を転じよう。複数形の各形態は単数形に複数接辞の *-dóu* が付いたものであるから、この *-dóu* がそもそも何であるかということがここでは問題となる。*-dóu* の本来の正体を明かすための手掛かりは3人称にある。3人称複数の *tu-dóu* に注目し、これを単数形の *tu* と比べてみる。両者の比較から、次の考えが浮かぶ。*tu* と *-dóu* とは同じ起源を有する2語であり、*tu-dóu* はもともと同じ語を重ねて複数の意味を表したものではなかったか。この考えが見当はずれでないことは次の二つの事実によって確かめられる。すなわち、一つはビルマ語の文語に *dóu* 「それ」という指示詞が存在するという事実に

よってである。そしてもう一つは、無声音の有声化が頻繁に起こるビルマ語にあって -dóu は -tóu の異形態であり、それが tu と形態的にきわめて似通っているという事実によつてである。

以上、ビルマ語の人称代名詞についてその成り立ちが具格接辞と深くかかわっていることを指摘したが、ビルマ語の具格接辞には一切言及しなかった。筆者が主張するように、具格接辞から人称代名詞ができたのであれば、ビルマ語の具格接辞は人称代名詞と形態的に似ているはずであろう。あるいは少なくとも、人称代名詞の起源であったとする \*-ga / \*-ti / \*-ma / \*-ji の反映形が何らかの格を標示する形態としてビルマ語に存在するはずである。このことを確認するため、ビルマ語の格接辞を例文付きで示す。なお、例文中の主格・対格・与格・向格・時格接辞は必須の要素ではない。

(6) -ká / -gá (主格・奪格・時格接辞)

čəno-gá yaunwekyan t̥auʔ-te 「私がお茶を飲んだ」  
私 - 主格 茶 飲む - 叙実法

məněi-gá japan-gá la-de 「昨日、日本からやってきた」  
昨日 - 時格 日本 - 奪格 来る - 叙実法

(7) -kou / -gou (対格・与格・向格・時格接辞)

čəno-dóu yaunwekyan-gou tauʔ-te 「私たちはお茶を飲んだ」  
私 - 複数 茶 - 対格 飲む - 叙実法

beɖu-gou bii p̥ei-de-lê 「誰に櫛をやったのか」  
誰 - 与格 櫛 与える - 完了 - 疑問

t̥u šayyón-gou t̥wâ-de 「彼は病院へ行った」  
彼 病院 - 向格 行く - 叙実法

čəno neʔphyin-gou twâ-me 「私は明日行く」  
私 明日 - 時格 行く - 叙想法

(8) -hma / -ma (所格・時格接辞)

t̥u akú éim-ma syí-de 「彼は今、家にいる」  
彼 今 家 - 所格 いる - 叙実法

t̥u-dóu sanay-něi-ma la-me 「彼らは土曜日に来る」  
彼 - 複数 土曜 - 日 - 時格 来る - 叙想法

(9) -né (具格・共格接辞)

čəmá-dóu sabain-né la-de 「私たちは自転車で来た」  
私 - 複数 自転車 - 具格 来る - 叙実法

hǒ-ma dokékaúg-né lu syí-bi 「あそこに杖をついた人がいる」

あそこ - 所格 杖 - 共格 人 いる - 活写法

khinmyâ-né čəno 「あなたと私」

あなた - 共格 私

čəno-dóu t̥u-né t̥uwâ-de 「私たちは彼と行った」

私 - 複数 彼 - 共格 行く - 叙実法

(10) -yé / -ké (属格接辞)

čəno t̥ú-yé əma-gou chit-de 「私は彼の姉を愛している」

私 彼 - 属格 姉 - 対格 愛する - 叙実法

以上の(6)~(10)に示した5種類の形態はビルマ語の格接辞のすべてである。これらの中に具格接辞 \*-ga / \*-ti / \*-ma / \*-ji に遡るものが存在するかどうか調べてみよう。またこれらの中に、人称代名詞形と類似した形態が存在するかどうかを確かめてみよう。

まず、(6)の -ká / -gá について言うと、これは明らかに \*-ga を引き継いだものである。しかし、それがなぜ主格・奪格・時格接辞であるかということは必ずしも自明の事柄ではない。その発展過程を筆者は以下のように考える。

おそらくビルマ語では、属格接辞の \*-ga から具格接辞と奪格接辞とが派生した。属格接辞から奪格接辞への変化は、たとえば日本語の奪格接辞 -kara がまさに属格接辞 \*-ga から派生したこと、すなわち \*-ga の反映形である -ka とその異形態 -ra とが合わさって形成されたのと平行的な変化であったと考えられる。

さて、属格接辞から派生した具格・奪格接辞のうち、具格接辞としての \*-ga は、あるいはその反映形は他動詞文主語を標示する能格接辞となった。しかし、能格接辞はやがて自動詞文主語にも波及したため主格接辞になった。一方、奪格接辞としての \*-ga は時格接辞を生んだ。時格とは筆者の造語で、要するに時間軸上の点を表す格のことであるが、時格接辞 -ka / -ga によって表されるのは過去の時点のみである。このような意味拡張、すなわち奪格の時格への派生は、すでに指摘されているように、行為が行われた時点を行為の出発点として捉えようとしたことに起因した。つまり、たとえば「昨日来た」という過去の事態を「昨日から来ている」というふうに現在中心の時間軸の中で把握しようとしたことに端を発したものである。

次に、(7)の -kou / -gou について述べる。-kou / -gou は、人称代名詞の1人称単数 kou と基本的に同形であるので、その源はやはり具格接辞の \*-ga ではないかと思われる。前述したように他動詞目的語として具格を従えることのできる言語が存在するので、こ

のことからしても、対格接辞の -kou / -gou に関してはそれを具格起源であるとするのは自然なことである。ところで、対格接辞というのはビルマ語にあっては比較的新しい時代に生み出されたものであるにちがいない。したがって、それと人称代名詞とが形態的に似ているからといって、それが人称代名詞の形成に関与したということはない。

対格接辞が何かを生んだとすれば、それは与格接辞である。対格と与格とはともに動詞の目的語となる。この共通性が媒体となって、対格接辞は与格にも波及した。こうして生まれた与格接辞から向格接辞と時格接辞が生まれた。向格接辞としての -kou / -gou は、方向性を表す与格接辞の機能が拡大して生まれたものである。また、時格接辞としての -kou / -gou はもっぱら未来の時点を表すことをその任務とするが、これは未来時の行為を到達点と認識したことによる結果であろう。つまり時格は、未来の事態が発生する時点を行為の到達点と捉え、それを向格で、たとえば「明日に生きる」というふうに表そうとしたことに始まったものであろう。

続いて、(8) の -hma / -ma についてその形態と機能の由来を考えてみよう。まず、-hma という形態について言うと、これは \* -ga と \* -ma が合わさったものが弱化した形ではないかと思われる。ツオナー・モンパ語麻瑪方言の人称代名詞に見られる声門音が \* -ga の反映形だとすれば、音声的類似性から判断して、-hma の h が \* -ga の反映形である可能性は高いと言える。ところで、-ma という形は -hma から h が脱落したものにちがいない。<sup>6</sup> 次に -hma / -ma の機能について言うと、所格と時格のどちらが原初的なものか分からない。つまり、時点を表す形態が時点と地点を表すようになったのか、地点を表す形態が時点と地点を表すようになったのか確定できない。いずれにせよ、\* -ga の反映形だけによって複数の意味を使い分けることが難しくなったため、本来は具格接辞であった -ma が付加されるようになったのであろう。この過程は、日本語の所格・時格・具格接辞 -ni に具格接辞 \* -ti の反映形 -te が付加されて -nite という新しい所格・具格接辞ができたのといくぶん似ている。

最後に、(9) の -né と (10) の -yé / -ké について述べる。-ne は具格の機能が本来的であり、共格の機能は派生的である。しかし、具格の機能はおそらく属格の機能から派生したものである。-né も -yé / -ké も \* -ga の反映形であり、-né は \* -ga > \* -nga > \* -ŋa > \* -na > -né という過程を経たものであろう。一方、-yé / -ké は \* -ga > \* -ka > -ké > -yé という過程を経てできた形であろう。このようにビルマ語の属格・具格接辞は、そこから派生した主格接辞や奪格接辞よりも、あるいは対格接辞や与格接辞よりも祖形から遠く離れた形態になってしまっている。

## 6. 口口語

口口語は中国の雲南省、四川省、貴州省、広西壮族自治区に分布する彝族が話す言語である。系統的には、チベット・ビルマ語派の口口・ビルマ語支に属する。口口語には多くの方言があって、文法構造にかなりの方言差が認められる。人称代名詞の形態も一様ではない。以下に、方言差を無視して、口口語の人称代名詞の体系を示す。

<表6> 口口語の人称代名詞<sup>7</sup>

	単数	双数	複数
1人称	ŋa	ŋaŋi	ŋoɣo
2人称	nu / ni( 属格 )	nuŋi	noɣo
3人称	tshŋ	tshŋni	tshoɣo

ここにあげた形態は主格・対格・属格接辞である。三つの格形は、2人称単数を除いて同じである。口口語には、具格・能格接辞と言ふべき -ku( < \*ka < \*-ga ) が存在するので、またそれが人称代名詞にも付属して能格主語になったり副詞的要素になったりする。主格・対格・属格は一括して絶対格と称することもできよう。

問題はこれらの成り立ちである。単数形の ŋa と nu が \*-ga の、tshŋ が \*-ti の反映形であることは言を待たない。なお、これらの形態と中期朝鮮語の na ( 1人称単数 )、nə ( 2人称単数 )、cə ( 3人称単数 ) との対応は注目に値する。

双数には双数接辞 -ŋi が付く。-ŋi は、\*-ga > \*-nga > \*-ŋa という変化を経て成立した \*-na が \*-ti の反映形と結合して尾子音を -i に変え、双数接辞となったのかもしれない。あるいは、そのようにして成立した \*-na が \*-ji の反映形と結合して -ŋi となったのかもしれない。

複数には複数接辞 -ɣo が付く。-ɣo は \*-ga の反映形である。したがって、1人称の ŋoɣo も2人称の noɣo も、はじめは同じ形態を二つ重ね合わせたものであったろう。一方、3人称の tshoɣo は複数接辞化した -ɣo が \*-ti の反映形に付加されたものと見なされる。

ところで、口口語の方言の中には能格言語の特徴も完全に失って、主格言語になっているものが少なくない。西田龍雄(1992)によると、南部の峨山方言では他動詞文が主格・対格構文をとるといふ。そして、主格接辞は -tca、対格接辞は -a / -la であり、人称代名詞もたとえば ŋo-tca 「私が」、ŋo-la 「私を」のようになるという。-tca は明らかに \*-ti の反映形であり、-la とそれが弱化した -a はおそらく \*-ga の反映形である。

このように口口語においても、\*-ga や \*-ti を伝承したいろいろな形態が一方において

人称代名詞の構成要素となり、他方においていろいろな格を標示する接辞となっている。しかし、具格接辞 \*-ga / \*-ti / \*-ma / \*-ji は人称代名詞と格接辞としてのみその姿を今にとどめているわけではない。具格接辞はさまざまな文法的要素となった。このことは後の稿で論じるつもりであるが、ここで \*-ti を引き継いだ口口語の *çi* 「このように」と *adzɿ-çi* 「あのように」の *-çi* について一言しておきたい。これらが人称代名詞の成り立ちを説明するのに好都合だからである。

具格接辞は基本的に名詞を副詞化するものである。したがって、それが副詞化接辞となっても不思議ではない。様態副詞 *adzɿ-çi* 「あのように」の *-çi* はまさにそのような副詞化接辞である。一方、*çi* 「このように」は何かと言うと、これは様態副詞そのものである。そしてこれは、*adzɿ-çi* の *-çi* ともともと同じものであったと考えられるので、具格接辞の \*-ti が様態副詞となった例であると言うことができる。

このように具格接辞が様態副詞になりえたということは、具格接辞が人称代名詞に変身できることを物語っている。というのも、様態副詞はそこに名詞的ないしは代名詞的意味を内包しているからである。たとえば、「早足で」という様態副詞は「早足」という意味を、「このように」という様態副詞は「このよう」という意味を含んでいる。まさに *çi* がそういう意味を表しているのだが、これは具格接辞 \*-ti にもともと存在していた意味ではない。それは含意されていたものであった。含意されていたものが明示されるようになったのである。口口語の *çi* は、含意された名詞・代名詞的意味が明示されるようになって生まれた様態副詞である。口口語の人称代名詞も、本質的にそれと同じ変化によって生まれたものにちがいない。

本稿では、チベット・ビルマ語派の人称代名詞がアルタイ諸語や北米インディアン諸語の人称代名詞と同様に具格接辞から生まれたものであることを論証しようとした。チベット語、トゥルン語、ツオナー・モンパ語、ネワール語、ビルマ語、口口語における人称代名詞の語構成を考察した結果、それらが具格接辞 \*-ga / \*-ti / \*-ma / \*-ji と密接に結びつくことが判明した。これら具格接辞の祖形からさまざまな異形態が発生し、それらが蓄積され、そしてそれらが相互に作用しながら機能分化して人称代名詞の体系ができあがったという考えは、決して現実離れた想定ではない。むしろ、このような仮定に立たなければ、たとえば 1 人称単数能格形がツオナー・モンパ語の麻瑪方言で *ɲai-te* であり、同じツオナー・モンパ語の文浪方言で *ɲai-gai* であるという事実を、また同系のツァンロ・モンパ語でそれが *tçi-ki* であるという事実を首尾よく説明できないのである。

### 注

1. 北村 甫・長野泰彦・西 義郎・西田龍雄(1989)を参考にした。
2. 長野泰彦(1989)に依拠した。
3. 西田龍雄(1989)に依拠した。ただし、声調を無視して表記した。
4. 長野龍彦(1986)に依拠した。
5. 清水紀佳(1992)に依拠した。
6. ミャンマー出身の名古屋大学留学生、ティン・ティン・エーさんによれば、少なくともミャンマーの首都ヤンゴンではもっぱら -ma を用いるという。
7. 西田龍雄(1992)に依拠した。ただし、声調を無視して表記した。

### 引用文献

- 北村 甫・長野泰彦・西 義郎・西田龍雄(1989)「チベット語」亀井 孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典』第2巻:764-791.三省堂.
- 近藤健二(2002)「アルタイ系具格接辞\*-jiの後裔(後編)」『言語文化論集』第XXIV、号第1号:119-139.名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科.
- 清水紀生(1992)「ビルマ語」亀井 孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典』第3巻:567-610.三省堂.
- 長野泰彦(1986)「チベット・ビルマ系諸言語における能格現象をめぐって」『言語研究』第90号:119-148.日本言語学会.
- (1989)「トゥルン語」亀井 孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典』第2巻:1269-1280.三省堂.
- 西田龍雄(1989)「ツオナー・モンパ語」亀井 孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典』第2巻:1046-1052.三省堂.
- (1992)「口口語」亀井 孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典』第4巻:1099-1113.三省堂.